

るゝに至つたことは現代史研究上喜ばしい傾向であるが、今回大塚金之助、平野義太郎、野呂榮太郎、山田盛太郎の四氏編輯の下に生れ出た「日本資本主義發達史講座」の如きは就中白眉として期待せしめるものである。同講座は明治維新の成立とそれが新展開を講じ現代社會に於ける政治的若くは經濟的情勢の不安の根本的解決に資せんとするもので、第一部明治維新史、第二部資本主義發達史、第三部帝國主義日本の現狀、第四部日本資本主義發達史資料解説の四部門に分ち論ぜられてゐる。各部門の細目に就いてその内容を推察するに社會經濟狀態、階級關係、政治的支配關係、世界狀勢、思想的動向等、従前漠然と取扱はれたに過ぎなかつたところを精緻に分析批判し、過去に關係してこれをとくは勿論、未來への發達の契機を把握するにも充分の考慮がばらばれてゐるかに見える。

又第四部に資料解説を説みんとせることに依つて、本講座が煽動的意圖の下に企てられたのではなく、正確なる資料に基いて真相を簡明せんとするものであると見られる。未だ第一分冊を手にしたのみでかゝる企圖が如何なる程度に満たされてゐるかには知り得ないが、而も今迄の所或程度期待の裏切られざるを思ふ。

講師の顔ぶれ、何れも知名の新興學徒、必ずしも歴史專攻者でないにも拘はらず、従來充分明かにせられざる點に銳利な分析ツメスを振ひ得てゐるが、このことは、所謂歴史時代研究者なる歴史家必ずしも明治、大正、昭和時代研究の第一人者たら

ざるを思はしめる。

今後六回に亙る諸分冊に、講師諸氏が公平な立場に立つて歴史的事實を批判し、將來を指導するの責を全うし、併せて從來の諸研究の缺を十二分に補正せられんことを冀ふ。會費 一冊 一・〇〇 七冊七・〇〇 申込金なし、東京岩波書店(吉田)

繪巻物概説

福井利吉郎著

(岩波講座「日本文學」第十二回所收)

書肆岩波がその計畫になる幾つかの講座の一つとして「日本文學」を刊行し始めたのは昨年六月のことである。爾來今日まで配本十二回、既に豫定回数の半を越し總頁數は凡て五千の多きに達してゐる。この講座はもと極めて多くの事項に亙り廣く諸方面の執筆者を集めてゐるので、個々項目を異にする毎にその色彩の違ふものがあるが、なほそれらの上に全般的に一つの傾向の目立つて認められるものがあるとなれば、それはそれらがいづれもひとつこの方面の研究にドミナントであつたところの輕浮な印象批評的態度を棄て、一様に著しくその資料に即して着實に考察を加へようとしてゐることではなからうか。それは必ずしも徒に二三の新資料の發見やいはゞ無目的なテキストの校訂などのことのみを言ふのではなくして専ら廣き流布によつて常識化された通説の、根本資料に基く嚴密な再吟味である。そのことの爲にはもとより一般の自由なる利用に委ねられる様になつた資料の豊富とそれにもまして學界に於ける若き新しい

登場者の夥しい多數と、なほ全體として現在に於ける即物的な批評意識が考へられるであらう。兎まれ我々は少くともそこに日本文學の研究が、今や東圃の「國文學全史」の段階を確實に越えようとしてゐるのを見る事が出来るやうに思ふ。

今こゝに紹介しようとする福非利吉郎氏の「繪卷物概説」はかゝる傾向の一例としてその取扱ふところ直接國文學に關するのではないが、その關係項目として偶々最近に刊行されたものの中特に注意すべきものあるを思ふのである。即その一編は名は繪卷物概説ではあるが「不確實なる知識を本として一通り世に知られた繪卷物の類を系列し叙述し」ようとしたものではなくて、却つて將來の繪卷物概説の一基礎を造る事を本旨として一つの代表的繪卷の全領域に互つて徹底的な基本研究を試みんとしたもので、著者がその爲に選んだものは高山寺の有名な鳥獸戯畫である。而してその方法としてはあくまで原繪卷そのものに直接に當ると共に、他面實物以外の摹本並に文獻的記載を摺搜して原品の理解に資することである。即、現品に就いては何よりもまづそれが當初の形にかへされねばならぬ。現存の四卷が二種の筆者を異にするもの、續ぎ合せより成つてゐることは從來人の注意するところ、その全卷を見たことのあるものにとつてはもはや疑なき事實であるが、著者は今識りうる最古の記載元龜元年の華嚴緣起裏書に「獸物繪上中下同類局二局」とあるを手がかりとし、益田高松兩家にある殘闕摹本をも加へて之を五卷に揃原しようとし、更にそれが爲に一見たゞ興のまゝに個々

鳥獸の戲態を寫したかの如く思はれる畫を全體として一つの有意味の筋あるものと考へ、之を數個の段落に分つて、一つ一つの場面の意味を何等の詞書なくして讀みとることに努め、また全體としての構圖の上の一の原理(所謂時間的經過倒叙の法)を把握しようとする。その結果この五卷は(著者の假に名づるところに從へば)猿僧正の卷(現第一卷)、畜生界の卷(現第二卷)人間界の卷(現第三卷前半)續猿僧正の卷(現第三卷後半)及續人間界の卷(現第四卷)として統一的に理解せられ、その性質は一種の六道繪として、現在に於てはその意味を完全に解くことをえない寓意と諷刺を含むもの、單なる戲畫でも寫生でもないと考へられるのである。次に著者は之が形式に於ける密教圖像的特色を稽へ、一面新出の岩倉男爵家舊藏の「ざれ繪」その他二三の新資料に基き、最初の三卷の筆者を高野山善如龍王像と同じ定智に擬定しようとし、爲に從來の所傳鳥羽僧正覺猷の畫技に對しては一般の批評とや、異つた見解を立つるに至つてゐる。今それら考證の根據とその手續とは茲に詳説すべき限ではないがその當否如何に就いてはなほ多く吟味を要するものがあるが前述の全卷の意味の解釋についても恐くはなほ異說あるを免れまいと思ふ、筆者がこゝになほ未完の論文をとり上げたのも敢てその新説の内容を吹聴せんとするものでではなくして、かゝる研究の上にわが國に於ける近時の文學史乃至美術史研究の傾向の一端のトせらるべきものあるを思つてである。論旨の當否についてはその方面の専門家達の力ある批評を待ちたい。(柴田)